

# おおいにしんおう 大西真応と高崎山の猿

旧太宰府町の公民館が発行していた公民館報は、地域の文化向上を目的とし昭和22(1947)年に結成された新生会を母体とする太宰府町文化会が同25年に創刊した会誌「太宰府」を引き継ぎ、同27年に新たに刊行されました。

公民館報は市民や地域の活動内容の記事を主としますが、他にも警察や税務署などの呼びかけや、市民らの随想など多彩な記事をその特色としていました。この公民館報になぜか、高崎山の猿の記事が載っています。筆者は大西真応といい、かつて高崎山で猿の餌付けに尽力した人物で、大宰府戒壇院の住職でした。

大西はかつて大分県の高崎山にある「万寿寺別院」に勤めていました。当時、高崎山周辺は戦後の食糧難のなか、猿害に悩んでいましたが、大分市長の発案で霊長類研究者の調査をヒントに猿の餌付けを開始します。それは、餌付けを万寿寺別院の境内で行うことで周辺の農作物被害を減少させると同時に、猿見物によって集客を行い、観光資源に変えようとする試みでした。仏教者として生物すべてを平等に愛していた大西も、餌付けに協力します。

餌付けは昭和27年11月26日から始まりまずがうまく行かず、その後、大西一人で餌付けを続けました。定期的に法螺貝を吹いて猿を呼び寄せたり、餌の改良を重ねるなどしてなんとか餌付けに成功します。猿たちにモン、モンコと愛称を付けて接していた大西の苦勞が実を結び、高崎山は昭和28



年3月に「高崎山自然動物園」となり、同年11月、「高崎山のサル生息地」として国の天然記念物に指定されます。

大西は昭和31年に戒壇院へ移りますが、その後も猿への愛情は変わらなかつた様子が先に紹介した公民館報の記事に見えます。同33年4月、第9回全国植樹祭のために昭和天皇皇后が大分県別府市を訪問する事になります。全国植樹祭は、緑化運動の一環として天皇皇后臨席のもとで行われる記念行事です。新聞報道では天皇皇后の訪問日程に高崎山が含まれていませんでした

が、大西は天皇が高崎山を訪れることを大いに期待しつつ、しかし意のままにならない猿のこどゆえ「不安と焦燥とゴチャまぜ」に、戒壇院で遭遇の時を待ちます。訪問初日の4月7日からラジオをつけっ放しにして、放送されるニュースに耳を傾けます。そしてついに訪問最終日の4月

9日、天皇皇后の談笑の後に「キヤツキヤツと交錯するサルの声」をラジオから聞き取った大西は、その感動を次のように書き記しています。「小生は鼻スジから額にかけて熱いものがクウト上がったと思つたら瞬間目頭が熱くなり、思わず口の中でつぶやいた。モンよ出かした！モンよ出かしたぞー！」

タイミングよく天皇皇后の前に現れた猿たちを褒める姿に、遠く太宰府にあつても猿たちのことを思う大西の優しい人柄が窺えます。